

| | |
|---------------|---|
| Title | エミリ・ブロンテとブリュッセル |
| Author(s) | 大橋, 克洋 |
| Citation | 大阪外国語大学学報. 50 p.71-p.79 |
| Issue Date | 1980-09-29 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/80809 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

エミリ・ブロンテとブリュッセル

大 橋 克 洋

Emily Brontë and Brussels

Katsvhioro Ohashi

While Charlotte Brontë's experience in Brussels is credited to be at once the highlight of her personal history and the key step in the evolution of the writer, Emily Brontë's nine-month stay there has attracted few scholars and critics, with only a perfunctory chapter devoted to it even in her biographies. This is partly due to the lack of tangible traces it left on her life and work and partly to a long-standing prejudice with which Emily Brontë has been stamped as a genius too reclusive and self-contained to be influenced from outside. Yet, no matter how uncongenial it might be to her, what she saw and heard there was all part of her experience of life; because Brussels has no distinct place in her work, it does not necessarily follow that the experience did not make any impression on her view and work.

This short study is an attempt to see in perspective what her nine months in Belgium really meant to the author of *Wuthering Heights*. In view of the fact that this is the only time Emily Brontë left home to be "educated" in the true sense of the word, emphasis will be centered on her reaction to "education" as seen in her attitude toward Constantin Héger, the man who taught the sisters in the Pensionnat.

1

シャーロット・ブロンテにおけるベルギー留学の重要性が大きく取りあげられる一方で、エミリ・ブロンテの生涯におけるベルギー留学の位置が問題にされることは少ない。無論エミリ・ブロンテ伝の中にブリュッセル留学が一章を占めないわけではないが、その意味を積極的に認めようとするものは稀である。ブリュッセルと『教授』や『ヴィレット』の作者との関係が強調されるその度合をそのままにエミリは故郷ハワースの原野に結びつけられてきた。そこからであろう、24才の女が異国の風土の中で過ごした9カ月間はまるで存在しなかったかのように黙殺されることになる。たとえ取りあげられるとしても、それは彼女と原野との「運命的な」結びつきを際立たせるのに利用されるためでしかなかった。

それ〔ブリュッセルでの勉強〕は彼女の胸に深くひそむ追放者の心を払拭してしまうほど熱

心なものとはならなかった。彼女のエトランジェの心はなつかしいふるさとへ想いを馳せるのがつねであった。〈中略〉ロー・ヘッドにおいて、そしてまたハリファックスにおいて、彼女を破滅に帰していた囚われの意識がブリュッセルでも彼女に襲いかかった⁽¹⁾。

これまでのエミリ論にベルギー体験が語られる際の傾向を示すことばと言ってよい。そこにあるのは望郷の念以上のものを決してみまいという頑な決意であり、姉シャーロットの「証言」に対する素朴な反応であり、過去の離郷との安易な類推である。望郷説自体を否定しようというのではないが、ブリュッセルに「原野とエミリ」を引き立たせるものとしての意味しか与えられないのはエミリ理解のためにも悲しいことだ。

ブリュッセル行きを単にコーワン・ブリッジ、ロー・ヘッドでの入学体験、ハリファックスへの赴任など一連の離郷の最終回たるにすぎないものとしてすますこともできまい。最初にして最後の海外体験であったこと、そこが旧教国であったこと、圧倒的な高齢における旅立ちであったこと——これらどの一つを取りあげても、何らかの独立した考察に価する特異な事件であったと言えるのではないか。にもかかわらずその考察がなされないというのも、自然との霊的な交感に生きた「荒野の詩人エミリ」を結論することに性急であるために違いない。

これから論究されようとするのは、他ならぬブリュッセル留学の意味なのであるが、私はそれを如上の「一方的な」エミリ観に対する一つの反駁の試みとして行なうつもりである。エミリの世界の決定因が他にあることを予感するからだ。その際、ブリュッセルを過去の離郷から切り離す条件として先程あげた3項目のいずれを取りあげるわけでもない。ブリュッセル体験の諸特徴のうち、エミリ・ブロンテの文学的生涯を考える上でより重大な問題をはらんでいると思われる、ある男との関係に焦点をしばって考究を進めていくつもりである。

ブリュッセルで姉妹を教えたコンスタンティン・エジェという人物は、あるエミリ伝⁽²⁾の記述をかりれば、晩年「新教授法 (new method) を適用し成功を轟かせた教師として国家的な名声を博し」、1896年世を去るにあたってはベルギー中の新聞がいっせいに「際立った死亡記事を書いてほめ称えた」ほどの教育者であった。優れた教育者にそれがなくてはならぬ「該博な教養と絶大な知力」の所有者であったことは言うまでもない。姉のシャーロットと後に知るギヤスケル夫人とを比較の対象からはずせば、まぎれもなくエミリの短い生涯が出会った最大の知性であったという点であらゆるブロンテ伝の記述は符合する。ブリュッセル行きはエミリの経験する初めての、字義通り「教育されるための離郷」であったわけだ。

この事実の提起する問題は意外に大きく、その意味を徹底的に考究するのでもなければかにブリュッセルを論じてみても無益なことで私には思われたし、またそれを主眼に据えてエジェ氏との関係に終始注目してみれば、ベルギー留学がエミリの人生においてもまた一つの大きな精神的ドラマであったことを他ならぬシャーロット書簡が暗示してくれるようにも思えたのだ。

シャーロットが友人エレン・ナッシーに書き送った手紙の中に、彼女のエジェ氏に対する第一印象が記されている。

There is one individual of whom I have not yet spoken—M. Héger, the husband of Madame. He is professor of rhetoric, a man of power as to mind, but very choleric and irritable in temperament; a little black being, with a face that varies in expression. Sometimes he borrows the lineaments of an insane tom-cat, sometimes those of a delirious hyena⁽³⁾

性的に抑圧され、知的刺戟に渴えていたシャーロットがこの知力と男性らしさとをあわせもつ人物に惹きつけられるのに時間はかからなかったはずである。ところがエミリの方とは言えば、同じ手紙によると、「エミリと彼の間はまったくうまくいっていません (Emily and he don't draw well together at all.)」⁽⁴⁾ というありさまであった。この「折り合いの悪さ」が、やがて反目にまで成長しながらブリュッセル滞在を貫いたと言えれば最も簡単にエミリの対エジェ関係を要約したことになるだろうか。

この期の資料を瞥見して気づくことの一つにエジェ氏の側からエミリに関し誹謗的言辭が、あるいは非難を行間ににじませた言葉が数多く吐かれている事実がある。伝記作者の保証する彼の人格の高潔さを思えばこれはかなり異例なことだと言わなければならない。例えば「エミリは利己的で我がままに見えた。妹を気づかうシャーロットの思いやりをよいことに姉に対して無意識にはあるが一種の専制を働いていた⁽⁵⁾」というのが彼の総合的エミリ観であった。事実在即した観察であったかどうかとも疑わしい⁽⁶⁾上に、これがエミリの死後を追いかけた言葉であってみればいささか辛辣に過ぎると言えるのではあるまいか。エミリに関する彼の発言の随所にこのような、教育者としての節度を逸脱したとも思える感情の動きを示す言葉が現れるのだ⁽⁷⁾。

この一見不可解な氏の態度はどうやらエミリ・サイドからのかなり積極的な反抗の意思表示に言わば応戦した結果であったようだ。シャーロットのブリュッセル第2信はそういった敵対関係のあり方を想像させる。

Madame Héger has made a proposal for both me and Emily to stay another half-year, offering to dismiss her English master and take me as English teacher; also to employ Emily some part of each day in teaching music to a certain number of the pupils. . . . Monsieur and Madame Héger begin to recognize the valuable parts of her character, under her singularities.⁽⁸⁾

8月で予定留学期間のきれる姉妹をもう半年間ブリュッセルに引き留めるため夫妻は二人を教師として雇い俸給と学費を相殺するという好意的な条件をもちかけたのである。それが実際に姉妹の指導にあたっていたエジェ氏の方から校長である夫人に働きかけた話であったことは言うまでもない。だが気持ちを動かしたのはシャーロットだけで、エミリはなぜかこれを退けようとしたようだ。エジェ氏にはそれがエミリの「我がまま」と映ったであろうが、結局嫌がる妹を説きふせて「専制」を働いたのはシャーロットの方だった。引用末尾の“her singularities”なる語は、この一件をも含めエミリが幾たびか教師の意に背反してきたことを示していると想像することは許されるだろう。

先ずエミリの側から師に対し繰り返し反撥の意が示され、それがエジェ氏側の対エミリ反感を惹起していった——それがエミリ・エジェ敵対の基本構造であったとするならば、これはエミリの「対人関係」のパターンを打ち破る特異なケースであると思わねばならない。エレン・ナッシーからギャスケル夫人まで多くの友人をもったシャーロットとは対照的に、彼女が大抵の接触者に所謂「エミリ・アレルギー」を与えたことは広く知られている。ギャスケル夫人流に言うならば「打ちとけたところのない(reserved)⁽⁹⁾」エミリが決して人好きのする女でなかったことは止むを得ない事実であろう。しかし嫌われた報復として嫌い返すという心の動きを彼女はもたなかったし、ましてや自分から積極的に人を嫌ったり反感したという記録はどこにも見い出せないのだ。彼女の誕生日日誌や数少ない手紙を見る限り、周囲の他人の存在など問題にならないかのようである。いずれにせよ膨大なシャーロット書簡中、エミリの他人との対立（しかも恐らくはエミリ側の反感に端を発したであろうもの）を明示あるいは暗示する記述がこの2例を除いては見あたらないという事実は見過ごしにできない。

これに関連して言うならば、今では語りぐさともいべきエミリの“singularities”がシャーロット書簡中初めて言及されるのも実はここである。「周囲との交通をいっさい求めず⁽¹⁰⁾」、「飾らない外見に力と炎を秘めて⁽¹¹⁾」、ひとり自己の内的世界に起居した〈スーパーウーマン〉は今日我々の前に提示される圧倒的エミリ像である。そのようなイメージを作り上げた張本人は他ならぬ姉シャーロットであったが、そのシャーロットと言えど何も当初から妹を怪人物視していたわけではない。ベルギー留学以前のシャーロット書簡に描かれるエミリは、処世的力量をはなはだ欠いた同情すべき人物に他ならなかった。ブリュッセルを境として彼女の対エミリ観は徐々に変調し、やがて畏敬に、更には驚嘆にまで発達していくのである⁽¹²⁾。『嵐が丘』第2版にシャーロットが付した回想と序文の中で決定的に表現される「例外者エミリ」の姿の胚芽がシャーロットによって意識され、記録されるのがブリュッセル留学期間中であり、しかもそれがエジェ氏との関係に根ざしていたとすれば、エミリ・ブロンテの生涯に荷うエジェ氏の意味は俄然容易ならぬものになってくるだろう。

一体エジェ氏の中にエミリを反感させる何があったのか。非常に男性的性格類型に属すと言われ、同性愛傾向までさやかれることのあるエミリである⁽¹³⁾。彼の男性らしさが何の魅力とも

感ぜられなかったのは当然であろうが、そのみでこの反感が説明できるわけではない。考えられるのはエジェ氏の二大特性のいまひとつ、知性との関連である。

1812年11月、伯母の急死により姉妹はハワースに呼び戻されるが、その際二人の帰途に託してエジェ氏はパトリック・ブロンテ師に一通の手紙を書き送っている。喪があげ次第姉妹をブリュッセルに送り返すよう懇請した手紙であるが、その中に次の一文がはさまれている。

Elle [Emily] perdait donc à la fois un reste d'ignorance et un reste plus gênant encore de timidité.⁽¹⁴⁾

エミリの留学が大いなる成果をあげたことをエジェ氏一流の皮肉をこめて語ったものだ。これを信じていいならば、エミリがエジェ氏に背反していく（「臆病さ」を失っていく）過程は、彼女が「無知」を失っていく過程と重なっていたということになる。即ち反撥の直接的原因としてエジェ氏のもつ「教化力」というものが浮かびあがってくるのだ。先の引用4及び8の最終文がいずれもエミリのすさまじい勉強ぶりを伝える文章にピッタリと寄りそわれているという事実もある⁽¹⁵⁾。これが単なる偶然でなければ、シャーロットは教化されることを避け得ない苛立ちを教化者への反撥に肉化していく妹の秘かな懊悩を鋭敏に察知していたと見なければならない。エジェ氏が稀有な知性であったことは先に述べた。加えて、その熱烈、強力な性格は実践的教育活動の場においてしばしばサディスティックな行動を伴ったという⁽¹⁶⁾。そのような苛酷さで「啓蒙されなければならない」ことにどうもエミリは耐えられなかったのではないだろうか。

こうした我々の想像を勇気づけてくれる一つの印象的な逸話がある。姉妹の高齢、並々ならぬ才能などを考慮したエジェ氏は、二人に対しては文法、語彙面の基礎教授を排し、所謂「ニュー・メソッド」を採用しようとした。フランスの一流作家からの精選作を読みかせ、その文体的特色、技巧上の特質を指摘してやった上で生徒にその作品の表現精神に倣ったエッセイを書かせようというものである。テーマの選定は随筆者に委ねられ、また瑣末なディクションに捉われて作文の本質を忘れることがないよう、辞書の使用は禁じられた。その大胆さが後にギヤスケル夫人を驚かせるメソッドであるが⁽¹⁷⁾、エミリの反応はこうであった。

After explaining his plan to them he awaited their reply. Emily spoke first; and said that she saw no good to be derived from it; and that, by adopting it, they should lose all originality of thought and expression.⁽¹⁸⁾

ベルギー娘達の畏敬と黙従に慣れていたエジェにとり、エミリ体験は一つの極めて新奇な体験であったことを思わせずにはいない反抗ぶりである。「エミリは臆病さをスッカリ失った」と書いた時、また後年ギヤスケル夫人を前に「彼女の屈強で傲岸な意志は反対や困難に出会っても決

してひるみはしなかったでしょう⁽¹⁹⁾」と述懐した時、エジェ氏の脳裏に先ず甦ったのはこの時のエミリの姿であったかもしれない。無論直接的にはエジェ氏の作文指導法に対する不賛成の意思表示にすぎない。しかし、いつもは話しかけられても姉より先に口を開くことのないエミリ⁽²⁰⁾がまず反論の口火を切ったという形で示される彼女の、事態の受けとめ方の深刻さの中には、何かしら、単なる作文上の抵抗を越えた、只ならぬ情動の存在が感じられないではない。それを、師の教化そのものを必死にかわそうとするエミリの悲痛なる想いとよべば「穿ち過ぎ」のそしりを受けるだろうか。

3

「反対や困難にひるみはしない」という評語はしかしながらさしあたってはエジェ氏の方にあてはまった。結局新教授法は実行され姉妹はエッセイを書かされる。エミリが都合何篇を書いたのかはわからないが、今日までに7篇が我々の目に触れる形で収集されている⁽²¹⁾。たかがdevoirsに過ぎないと言ってしまうばそれまでであるが、我々としていささか問題にせざるを得ないのはその内容の性質である。そこにエミリの特異な人生観が極めて露骨な形で表白されているだけではない。私が問題にしようと言うのは、例えば次のような言葉がその人生観を深刻なものにする上で軽視しがたい役割を果たしているのではないかと思われることだ。

我々の教育は偽善を大いなる完成の域へと導く（『猫』）。

教化の力をかりて私は人の本性を曲げ、全人類を陸下に従わせよう（『死の宮殿』）。

制作期日の順に、『猫』、『肖像——ヘイスティングズの戦い前夜のハロルド王』、『手紙』、『孝愛』、『兄への便り』、『蝶』そして『死の宮殿』の作品群を一見して気づくことは、それらがすべて同一の主題のヴァリエーションであることだ。要するにそこにあるものは人間存在の宿命的な暗さの想いに他ならない。人は生きていく以上悪に犯されざるを得なく、至純さを保とうとするあらゆる営為はむなしい——そのような暗い人間観にエミリは憑かれているようにみえる。

「〈エッセイ集〉の世界から『嵐が丘』までは一步である⁽²²⁾」と言うのはミュリアル・スパークであるが、それが『嵐が丘』の中に、自然と社会、野性と文明の二律背反を主要デザインとして読みとった者の言葉であることは明らかだ。ここに打ち出されているものもやはりそれであるのだが、ただ「あらゆる文明性に対する原始の決戦」とも思える『嵐が丘』の世界とは裏腹に、「文明の威力の強大さの前で避けることのできない野性喪失の悲しみ」の方がもっぱら語られている点は見方によっては小さくない断層である。

「われら少年時の魂の和合、あの甘く穏やかな幸福」は骨肉の争いの前に脆くも崩れ去り（『兄への便り』）、孝心は忘れ去られて、「生まれながらの神に似た姿はいまわしくも損傷」され

るのだという（『孝愛』）。環境の束縛を脱した人間の「崇高さ」が語られ（『肖像』）、胸に再び「自然な感情」を取り戻した人間が描かれようと（『兄への便り』）、それらはいずれも死に臨んだ時でしかないと厳しく極限されている。

エミリにとって社会とはほとんどソーシャル・ダーウィニズム的なせめぎあいの世界であったのだろうか。「生は破壊の原理に基づいて営まれ、あらゆる生物は生きのびるため仮借なき殺人者たらざるを得ない」（『蝶』）という。「偽善」、「忘恩」、「残酷さ」（『猫』）、「不孝」（『孝愛』）、「骨肉の争い」（『兄への便り』）……次々に人間の、目をおおうばかりの邪悪が語られながら、それらが社会の中で生み出されるものであることが示される。「真情をつつみ隠して偽善を用いなければ社会から放逐され」（『猫』）、利害のためには魂を愚行と悪徳の淵に沈めなければならないからだ（『肖像』）。

このような社会の掟の前で生まれながらの至高性を遂に保ちきれないのが我々の生存の宿命であるとすれば、宇宙全体が「悪をもたらすためにのみ構築された一つの巨大な機械」としか思えず、生存は「説明不可能な謎」（『蝶』）と映しても致し方のないところであろう。

この想念の暗さは一体どこから来るのか。先ほども引用したスパークは、この留学でエミリは論理的思考を学んだとし、詩作品と『嵐が丘』の間にベルギー体験が横たわっている事実を軽視しない数少ない一人なのであるが、「それまで詩作品の裏に潜み黙っていた哲学的態度がここで初めて意識化され、明確な姿を与えられた⁽²³⁾」と言う。詩作品からエッセイ——更には『嵐が丘』——へとエミリの文学的生涯を貫く「哲学的態度」の存在を見ようとするのがスパークの立場であるとしても、ブリュッセル以前の「ゴンドル詩」に底流するエミリの生存観とエッセイ群のそれとの間に横たわる色調の差をまったく顧慮しないというのであれば、我々としてはしばらくこの言葉を留保せざるを得ない。少なくともゴンドルはこれほど暗黒の悲しみに閉ざされた世界ではない。侵略戦争、王位継承戦争、政治的陰謀、暗殺、謀反等を背景に据えてはいても、そこには主要人物間の美しい友情や恋愛に対する作者の文学的執着があった。

最後のエッセイ作品『死の宮殿』は、“civilization”の恐ろしさを効果的に諷刺した物語風エッセイであるが、そのような形で提示されるエミリの特異な厭世主義に接する時、その誘因をブリュッセル留学というユニークな体験、即ちエジェ氏のもつすさまじい教化力との対決という現実そのもののなかで求めるのはあながち奇矯なことではあるまい。野性を教化するのみではない。善を悪に、悪を善に逆転し、その転倒の不当さを嗅ぎつける感覚さえ麻痺させるものが教育であるという認識が彼女にあったことがわかるが（『猫』）、そのようなものである教育が世紀とともに増長していくのであれば（『死の宮殿』）最早この世はどうしようもないわけだ。

問題は教化、文明化の勢いの激烈さを見せつけられたことにとどまるものではない。今度ばかりは自分までもがその教化の勢いに抗しきれず、自己本来の姿を失っていかうとしているという不安をどうすることもできなかったということがあろう。生の醜さ、人の邪悪さをブリュッセルに来て初めて知ったというわけではない。だが自らがその醜悪さの中のみこまれていかうとす

る危険をこの時ほど痛切に感じなければならなかったことはないはずだ。エミリにとり自分の心は唯一の拠り所であり、何物にも明け渡せない牙城であった。5年前、その己の心に秘む墮落の可能性に苦しみ、やり場のない想いを「ゴンドル」の人物に仮託してうたったこともあった。

'Twas grief enough to think mankind
All hollow, servile, insincere;
But worse to trust to my own mind
And find the same corruption there.⁽²⁴⁾

エジェ氏への抵抗は言わば至上命令なのであり、思えば当然のことであった。

『手紙』においては、教育に対する呪詛の想いがホームシックと言わば抱き合わせの形で表出されており、ブリュッセルで書かれたたった3篇の詩⁽²⁵⁾（ここではとりあげなかったが）のいずれにも、幼時の無垢へのノスタルジアと望郷の想いとが重ねられているのと軌を一にしている。エミリのホームシックは決して単に彼女が「孤独を愛する荒野の精⁽²⁶⁾」であったことの反映ではない。望郷心の燃えさがかりが激しいなら激しいだけ、私はそこに、ある徹底した精神的姿勢の存在をみないわけにはいかない。それはひたすら社会化されること、文明化されることを排した一個の稀有な生を生き抜こうとする強靱な意志に還元できるものだ。エミリにとりハワースの原野が「絶対的な地点」であり、「在るべき場所」であったというならば⁽²⁷⁾、それはそこがこうした生き方を彼女にゆるす唯一の場所であったという意味においてでなければならないだろう。

（続く）

〈註〉

- (1) 中岡洋『エミリ・ブロンテ論』（国文社、1975年）pp.45—7.
- (2) Winifred Gérin, *Emily Brontë: A Biography*, Oxford, 1972, p.123.
- (3) C. K. Shorter, *The Brontës: Life and Letters*, 2 vols., London, 1908, vol. 1, pp.237—8.
- (4) *Ibid.*, p.238.
- (5) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, Penguin Edition, 1977, p.231.
- (6) 例えば、本稿4ページ6行目参照。また、そもそもの留学計画に消極的だったエミリをシャーロットが強引に同行させたのだというスパークらの推測は恐らく正しいであろう（スパーク後掲書、pp.54—5参照）。
- (7) 註14、19参照
- (8) Shorter, *op. cit.*, vol. 1, pp.239—40.
- (9) Gaskell, *op. cit.*, p.147.
- (10) Charlotte Brontë, 'Editor's Preface to the New Edition of *Wuthering Heights*', printed in *Wuthering Heights*, Penguin Edition, 1972, p.38.
- (11) Charlotte Brontë, 'Biographical Notice of Ellis and Acton Bell,' printed in *Wuthering Heights*, Penguin Edition, 1972, p.35.
- (12) 1845年のエミリ詩稿発見、1847年の『嵐が丘』出版、1848年のエミリの劇死目撃などの事件がそれを促進した。
- (13) Cf. Tom Winnifrith, *The Brontës*, Macmillan, 1977, p.26 & Melvin R. Watson, 'Wuthering Heights and the Critics,' printed in *Wuthering Heights: An Anthology of Criticism* (ed. Alastair Everitt), 1967, p.58.
- (14) Shorter, *op. cit.*, vol. 1, p.249.

- (15) 4は“Emily works like a horse”に従われ、8の最終文は“Emily is making rapid progress in French, German, music, and drawing.”に直続する。
- (16) Margot Peters, *Unquiet Soul: A Biography of Charlotte Brontë*, London, 1976, p.110.
- (17) Gaskell, *op. cit.*, p.233.
- (18) *Ibid.*, p.231.
- (19) *Ibid.*, p.231.
- (20) *Ibid.*, p.243.
- (21) Gérin 前掲書 Appendix に7篇すべてが原文のまま収録され、うち『手紙』と『死の宮殿』を除く5篇は Lorine White Nagel により英訳されている (Lorine White Nagel (tr.), *Five Essays Written in French by Emily Jane Brontë*, the University of Texas, 1948.).
- (22) Murial Spark and Derek Stanford, *Emily Brontë*, London, 1975, p.62.
- (23) *Ibid.*, p.62.
- (24) C. W. Hatfield (ed.), *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, Columbia University, 1941, p.36 (No.11).
- (25) *Ibid.*, pp.173—9 (Nos. 153—5).
- (26) 中岡前掲書、p.52。
- (27) 同上、p.60。